

保護者と保育者の子育て・保育への意識と 両者の比較調査

目次

1. 調査にあたって
 - ・本レポートの目的
 - ・調査概要
2. 各家庭・保育者それぞれの状況
3. 各家庭と保育者との関係の中に見えるもの
4. 終わりに

1. 調査にあたって

本レポートの目的

フレーベル館は今後、「『子どもたちの豊かな未来』創造のため、『子育て』に関わる全てを支援し、リードしていく存在となる」ことを会社の目指すべき姿に掲げています。

本レポートでは、子どもを取り巻くステークホルダーである、「保護者」そして「保育園・幼稚園の先生方」にインタビューを実施し、それぞれの子どもや子育て・保育に関する思いを明らかにし、双方の関係性を俯瞰的に見つめました。またコロナ禍により受けた影響などにも注目しながらレポートとしてまとめています。

子どもにかかわる両者の状況やその間にある課題に目を向けることで、子どもの育ちを支える上で何が大切なのかを考え、議論のきっかけになることを期待しています。

調査概要

目的

子を持つ家庭と保育者、それぞれの子どもに対する思いを調べ、意識のずれを明らかにすることで、よりよい関係性づくりの方向性を示す。さらにコロナ禍での子育てに対する意識の変化も明らかにする。

対象者

共働き家庭のご夫婦	6名
専業主婦家庭のご夫婦	4名
保育園・幼稚園の先生	5名

期間

2020年8月17日～28日（2週間）

方式

◆調査方式
オンラインまたは対面での
デプスインタビュー形式にて調査を実施。

◆分析
合計26名が参加し、多様な視点でインタビュー結果について議論。
4時間×4回のワークショップ及びラップアップセッションを通じ本レポートを作成。

2. 各家庭・それぞれの状況

子育て・保育におけるベースにある価値観

本ページでは各ステークホルダーから見た代表的な子育て・保育への思いを掲載。次ページ以降ではステークホルダーごとに「抱える課題」と「コロナ禍での影響」を紐解く。

1 共働き家庭

仕事に、家事に、子育てに、とにかく
時間がない！子育てのメインは妻

仕事と家事と子育て。とにかく時間がない中で色々やりくりをして毎日忙しく生活をしている。子育ての比重は妻に偏る傾向にある。

子どもには「自分がしてよかったこと」「できなかったこと」を経験させてあげたいと思っていて、自分の悪いところは似て欲しくない。

自分の人生経験に基づいて子育てをすれば、子どもには自分並みかそれ以上の人生を歩めるのではないかと考える。高望みはしないが、ある程度の生活ができるように育てほしい。

また、子どもがやりたいと言ったことはやらせてあげたい、意思を尊重したいという気持ちは抱えているものの、あくまで親の決めた枠の中で選択することを子どもの主体性として捉える傾向にある。

2 専業主婦家庭

夫婦の役割ははっきり。
妻の役割は「家事」「子育て」

家庭の中で、夫婦の役割ははっきりと分かれている傾向にある。妻は家事・子育ては自分の「役割」として捉えており、子どもと接する時間や考える時間も長く、生活は子ども中心に回っている。

一方で夫は子育てに関わりたいと思っているものの、自分の役割は仕事なので、基本的に子育ては妻に任せている。子育てに多く関わらなくとも子どもと一緒に過ごす時間を大切にしたいという思いや、父としての威厳や良い影響を与えたいという思いもみられる。

子どもの意思を尊重したいという思いはありつつ、子どもには将来やりたいことができるように選択肢を与えてあげたいという思いもあり、そのための教育をしたいと考えている。

3 保育者（保育所・幼稚園の先生）

子どものための保育に注力したいが、
日々の業務が忙しく時間が足りない

子どもと向き合うことに注力したいと思っているが、日々の業務量が多く時間が足りていないと感じている。

保育の経験や文献を通じた自分なりの「保育観」や「子どもへ望む姿」があるが、日々子どもと向き合う中で考えが変わることもあり、答えを模索し続けている。新たな気付きを得るからこそ、自分の考えが正しいか不安になるが、答えは子どもの中にしかないと感じることもある。

また、たくさん子どもを見てきたからこそ、大人が決めた枠やカリキュラムではなく、子どもの主体性を尊重しその子らしさや興味を伸ばしていけるような保育がしたいと考える。そのためにも1人1人と向き合い、子どもを導くには自分自身が主体的である必要があると感じてる。

課題①

**子育ての正解がわからないので
安心材料が欲しいが、悩んでいる
時間がないので自分の価値観
に合わない情報はらない**

子育ては「成果」がわかりづらく、問題なく子育てできているか自信がないと感じることもある。それでも自分はちゃんと子育てできていると思いたいし、他人に子育てのやり方を否定されて嫌な気持ちになりたくない。また、他の家庭や子育ての情報を知ってしまうと比べて悩んだり、惑わされたりするので価値観に合わない情報はらないと感じている。そんな中、「目に見える子育ての成果」として子どもの成長が感じられると安心する。

課題②

**夫婦間の子育ての捉え方が異な
っているが、お互い衝突を避け
るため子育てに関する会話が少
ない**

夫は子どもと遊ぶことを子育てとして捉える傾向があり、しつけや家事全般を行う妻と大きな意識のギャップが生じている。その原因としては、日々時間がない中、夫婦間で子育てに関する会話が慢性的に少なく、お互い波風立てたくないのなるべく口を出さないようにしていることにある。またその背景として「子育ては母親がやるべき」という意識が根深く存在しており、お互い深い関わりを諦めてしまっているのではないかと考えられる。

課題③

**子どもに時間を使えない罪悪感
を日常的に感じている**

子どもに時間をたくさん使えていない罪悪感を日常的に抱えながらも、仕事との板挟みである程度は仕方ないと思うこともある。本当は子どもにとって良くないのではないか（受動的なかかわりになってしまう事が気になる）と思いつつもTVやYouTubeに頼ることもある一方で、罪悪感があるからこそ玩具を買ったり一緒に料理をしたりして普段子どもに時間や手をかけてあげられない分を補ってあげたいと思っている。

課題①

いつのまにか「大人にとってのいい子」を求めてしまい親視点の子育てになる傾向がある

子どもが人前でちゃんとできることを重視している部分があり、周りからいい母親だと思われたい気持ちから親主体の子育てになっていることもあるのではないかと思われる。周りの目を気にしたり、子どもの将来を意識したり、子育てが成功するか否かは自分の責任だと考え、強いプレッシャーを感じる。このように他人の目を気にしてしまう背景には、多様性があまりない環境で過ごしていたり、失敗を許容しないような社会や自己肯定感を高めるのが難しい社会が影響していると考えられる。

課題②

自分の思いに共感してくれる相手に1人で抱えているものを吐き出したいが、心を許せる人は限られている

普段ほとんど子どものみと向き合っているため、社会や家庭以外の人とのつながりを求める気持ちもある。子育ての大変さや思いに共感してくれ、否定せず自分を受け入れてくれる人・支えになってくれる人は、限られている。夫が一番近くにいる存在ではあるが、子育てに関わる時間が短いので、話を聞いてもらっても共感までは難しいと感じることもある。また、子どもとの時間が長いので子育てから離れた自分だけの時間は貴重であり、なるべく確保して息抜きしたいと感じている。

課題①

子どもの成長の捉え方について 親と目線を揃えづらい

保育者は物事のプロセスや頑張りにおいて子どもの成長を捉えており、親に伝えたいと思っているが、親はできる・できないの結果を重視する傾向が強い。子どもの成長について思いを伝え合いたいと思っているが、会話できる時間も限られるためうまく意思疎通できないこともある。また、保育者はいつも子どものために保育をしたいと思っているが、時に親側からのリクエストに子どものための視点がないことが感じられ、ジレンマを感じている。

課題②

保育には明確な答えがない中、 子どもを導いて行く責任を感じる からこそ不安は尽きない

保育者は保育の答えは経験や子どもの反応から導き出すしかないと考える傾向があるが、いくら経験を重ねても不安は尽きず解消したい。そのため、第三者の評価を知りたいと思ったり、心から信頼できる絶対的な味方が欲しいと思っている。同じ職場の保育者には経験値や年齢、思いも違う人たちもいるので、保育者同士が会話できるわずかな時間内だけでは、悩みを打ちあけたり思いを伝えきることが難しいと感じている。

課題③

他園や他業界との交わりがほとんどなく、 新しいことを取り入れる機会が少ない

他園や他業界と関わる機会や時間がほとんどなく、自園に閉じた世界になってしまうことがある。そのため、なにか問題が起きても解決のために参考になる情報が入りづらかったり、園の方針や行事のあり方を立ち止まって見直すきっかけが作りづらかったりする。また、自園の取り組みや考えを外部へ伝える機会も少ない傾向にあり、伝えたいと感じても伝える術がわからないようなこともある。

影響① 「時間の使い方が変わった」



夫婦間の役割に変化が起こった

共働き家庭

専業主婦家庭

夫の子育ての関わりが増えた

子どもに甘かった夫がだいぶ厳しくなり母親っぽくなってきた
(40代・妻)

妻が出社中はずっと家で子どもと過ごしていたが辛かった
(30代・夫)

お互いが一杯一杯にならないよう交代で子育てした
(20代・妻)

在宅勤務で育児の時間が取れるようになった
(20代・夫)

夫婦間の役割が明確になった

役に立とうと思ひ皿洗いをしたが奥さんはやらなくていいと言う
(30代・夫)

家のことは私の仕事。夫を台所に立たせるのはすごく気持ち悪い。家事も自分のペースでやりたい
(30代・妻)

コロナが怖いので買い物は自分が行くようになった
(40代・夫)



子どもと四六時中一緒に過ごした

共働き家庭

専業主婦家庭

子どもとどう時間を過ごすか試行錯誤した

プールで遊べないので水風呂にして遊んだ
(20代・夫)

子どもが楽しめかつ胃袋に入るよう料理を一緒にやった
(30代・妻)

育児と仕事の板挟みで相手をせずTVを見ているのはネグレクトではないかと心が痛んだ
(30代・夫)

ベビーシッターを頼んだら仕事に集中でき、すごく良かった
(20代・妻)

妻の肉体的/精神的負担が増えた

オンライン保育だとPC操作もあり嫁が付きっきりで疲れていた
(40代・夫)

妻は「お家の事を守るのが私の仕事なのにうまく回せてないんじゃないか...」と落ち込んでいた
(30代・夫)

姉妹のケンカが増えたがママ友に「ケンカし合える相手がいてよかったね」と言われ心が楽になった
(30代・妻)



立ち止まる時間ができた

保育者

自分と向き合ったり普段できないことができた

やっと1年目の先生へアドバイスを話す時間ができた
(30代・保育園)

文献を読んで自身の保育の根幹になるものを見つけた
(60代・保育園)

普段の当たり前が実は当たり前じゃないと言うことに気づけた
(40代・幼稚園)

SNSを通じ社会での保育の立ち位置を学んだ
(30代・保育園)



影響② 「イレギュラーな対応が必要となった」

園としての姿勢を明確にし親・職員とコミュニケーションを図った

保育者

普段はない判断やコミュニケーションが増えた

親のケアが必要と判断し各家庭と電話面談を行った
(40代・幼稚園)

職員会議ではコロナでどうしていくかの話ばかり
(40代・幼稚園)

仕事が休みでも預ける親にイラッとすることも事情があるのではないかと気になった。関係性ができていたら直接聞けたのに...
(30代・保育園)

行事の中止や延期で謝ることばかりが多く苦しい
(40代・幼稚園)

判断される園長先生たちが大変だったと思う
(30代・保育園)

3. 各家庭と保育者の間に見えるもの

【各家庭と保育者】関係性から見える課題

共通点

心から思いを共有・共感したり 相談できる相手が欲しいが周りに少ない

親と保育者の両者共、子どもや子育て・保育に対して思いや悩みを抱えており、自分と同じ立場や同じ思いのある人に相談したり共感し合いたいと思っている。自分の状況を理解しているからこそその意見が聞けると心が楽になるが、完全に心を許して話せる人は周りにあまりいない。

子育てサロンに行ったが価値観が合わない人の意見は遠回しに自分の子育てを否定されている気分になった
(20代・妻)

ママ友とは同じ悩みを共有できて、励まし合える大切な存在。主人は聴くだけで共感はしてくれない
(30代・妻)

保育士の母親に悩みを聞いてもらえるだけで楽になる
(20代・保育園)

休憩を削らないと先生同士で話せる時間がない
(30代・保育園)



課題

①

共感がほしいけど、誰でもよいわけではない

子育ても保育も答えがないからこそ、誰もが悩みを抱えている。誰かとその悩みや不安を共有したい気持ちがある一方で、打ち明ける相手は自分が傷つかないように慎重に選んでいるようにも思われる。だからこそ相手を見つけにくく、一人で抱えてしまったり、苦しくなったりするという事態も起きている。

ギャップ

子どもや成長への捉え方の目線が揃っていない

保育者は理念や思いをもって保育をしているが、親はカリキュラムや自宅からの距離、預かり時間、園庭の有無、入園しやすさなどの理念以外の条件で園を選ぶ傾向にあり、園の理念や方針に対して意識する機会も少ない。

園選びも熾烈な争いで入れてくれるならどこでも行きます！となる
(30代・妻)

動画を取るために行事をやって欲しいという親もいた
(40代・幼稚園)

親へ「子どもと一緒に支えていく当事者として園に向き合ってもらいたい」と伝えている
(60代・保育園)

この園がいいとかはなく距離で決めた
(20代・夫)

子どもの日々の成長を親と一緒に分かち合いたい
(20代・保育園)



課題

②

子どもへの捉え方のズレがあるため わかり合えない

親は子育ての答えを他の子との比較や表面的に見えるものに求める傾向があるが、保育者は子ども一人ひとりの中にもそれがあると思っている。このスタンスのギャップにより、親と保育者の子どもや成長に関する捉え方にもズレがでてきている。そのため、伝えようとしても伝わらない、というような掛け違いがおきている。

【各家庭と保育者】 関係性における課題解決策の方向性

課題 ①

共感がほしいけど、誰でもいいわけではない

解決策の方向性

それぞれがそれぞれの立場で悩みを抱えている。
まずはそれぞれが安心して気軽に思いを吐き出せる場が必要なのではないか。
また場を設けることはもちろん、当事者同士をマッチングしたり、専門家とつないだりするなど、直接的な当事者でない我々だからこそ建設的なコミュニティをつくっていきけるのではないかと考える。

また、子育てにおいて、当たり前のように母親主体で話を進めていきがちだが、父親が子どもについて知る機会を設けることも重要である（知りたいと思っても知るすべがなく、入り込みたいと思っても入れる雰囲気がない現状がある）。

さらに、これから親となる世代に向けても、子どもに関して知識を得る経験を提供することも、これからの未来をつくる上で必須であるのではないか。

課題 ②

子どもへの捉え方にズレがあるため、
理解し合えない

解決策の方向性

現在の日本において、自分の子どもが生まれるまで子どもに関わることが少ないという人が一般的には多く、子育てや保育について知りたいと思っても知る機会がないという現状がある。

保育園や幼稚園が、子どもや子どもの育ちの重要性を伝えようと思っても、一般的な大人にとって、その大切さを理解するための素地がそもそも育っていない（例：「遊びが学び」という言葉を保育・幼児教育ではよく使っているが、現場以外では言われてもピンとこない）。

現実的なそのズレを園側にも伝え、伝え方の手伝いを行うとともに、子どもへの理解を高めるために保育者の専門性をもっと社会にアピールしていくことも我々に課せられている任務であると考えられる。

子どものことを知ったり、語ったりできる社会に

人類において、子どもは未来である。

子どもを考えることは、人類の未来を考えることにもつながる。

子どもとは何なのか、どんな可能性があるのか、その育ちにとって大切なものは何か、我々大人は何をすべきなのかを社会全体で考えていく世の中になるよう、子どもの育ちを支えてきた我々こそが社会に問いかけ、その価値観を変えていくことが大切ではないか。

4. 終わりに

終わりに

今回のリサーチを通じて、子どもを取り巻くそれぞれのステークホルダーの方々の、それぞれの立場で課題がたくさんあることがわかりました。また、子ども「保護者」と「保育者」の間に“ズレ”があることも垣間見れました。

また課題の背景を深く議論を重ねていく中では、自己肯定感を高く持つことが難しいという国民性や社会風潮、根強くある性別による家庭内での役割意識など一足飛びになかなか解決しづらい課題も散見されました。

私たち子ども子育て研究室は、「子どもと社会をつなぐことで、子育て・保育の課題を解決する」というミッションを掲げ、今後も継続して子どもをとりまく環境を見つめ、丁寧に解決への糸口を掴む活動に取り組むために、関係者の皆様と議論していきたいと考えております。